

新しい暮らし方を考えるフォーラム

開催概要

- ・開催日時: 2026年2月5日 10時~12時
- ・開催場所: 滋賀県庁(滋賀県危機管理センター)
- ・コーディネーター: 鵜飼 修 様(滋賀県立大学 教授)
- ・パネリスト: おおたき里づくりネットワーク 朝比奈 遥 様/暮らシフト研究所 藤田 知丈 様/
近畿環境保全株式会社 遠田 万葵 様/株式会社パレット 吉田 香奈子 様

滋賀県では、多様性が尊重され、誰もが自分らしく暮らせる社会の実現に向け、一人ひとりが主体的に描く暮らし方を「新しい暮らし方」として捉え、検討を進めてきました。こうした取組の一環として、令和8年2月5日、「新しい暮らし方を考えるフォーラム」を開催しました。

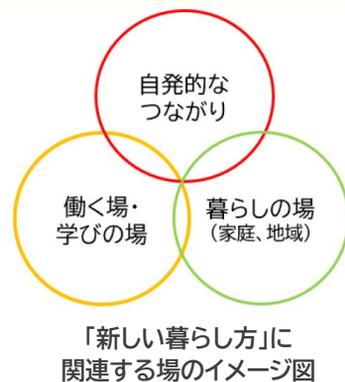
事務局説明 ~「新しい暮らし方」について~

冒頭に事務局から、滋賀県では「多様性が最大限尊重された、豊かで自分らしい暮らし方」を「新しい暮らし方」とし、この暮らし方を一人ひとりがデザインできる社会を目指しているとの説明がありました。

「新しい暮らし方」について多くの方々と考えていくために、健康しが共創会議のワーキングチームでの意見交換や、事例収集とヒアリングを通じて、「新しい暮らし方」に関連する3つの「場」(「自発的な繋がり(ボランティア、趣味等)」、「働く場(職場)・学びの場(学校等)」、「暮らし

の場」(家庭、地域))に分類したことや、複数の場が重なり合っている事例が多くあったと説明しました。

「新しい暮らし方」実現に向けては、多様な場への参加を周囲と社会が認めることが重要であり、「あの人は変わったことしている」ではなく「こういう暮らし方もある」と社会が受け止めることが強調され、県民に多様な暮らし方や働き方の事例、背景にある考え方を広く伝えていくことの重要性が述べられました。



話題提供

滋賀県立大学 教授 鵜飼 修 様



新しい暮らし方の事例紹介に先立ち、コーディネーターより話題提供がありました。アフターコロナやSNSの普及により、社会の孤立化が進んでいるのではないかと問題提起しました。

一方で、地域や人とのつながりを求める動きが広がっていることにも触れました。また、多様性は特別なものではなく、本来は当たり前を受け止められるべきものだと言いました。

その上で、各事例における「滋賀らしさ」とは何かを考えたいと述べました。最後に、「豊かさとは何か」を共通の問いとして提示し、事例紹介へとつなげました。

朝比奈様からは多賀町大滝地域を拠点に進められているまちづくりの取組が紹介されました。人口減少や高齢化、交通手段の不足など、地域が抱える課題を出発点に、住民と話し合いながら将来像を描いてきた経緯が語られました。

その実践として、給食弁当の製造販売をはじめ、子どもや大人の居場所づくり、買い物支援の移送サービスなど、日常の暮らしを支える事業を展開していることが紹介されました。

いずれの活動も、地域の声や「こうあったらいい」という思いを大切にしながら進められている点が特徴的でした。

また、ふるさとワーキングホリデーなどを通じて、地域外の人との新たなつながりが生まれていることにも触れました。地域の人々が楽しみながら関わり続けることが、結果として持続可能な地域づくりにつながっているとまとめられました。



藤田様からは米原市曲谷地域を拠点とした「暮らシフト研究所」の取組が紹介されました。

自然環境と共に暮らす中で、健康を基盤としたウェルネス志向の生活や、食・仕事・地域活動を切り分けず暮らシフトが実践されています。

ヴィーガンカフェの運営や宿泊・体験事業、自然農や林業活動などを通して、

日々の暮らしそのものが社会や地域とつながる活動となっている点が特徴です。

また、完全移住に限らず、多地域居住や関係人口といった柔軟な関わり方が、人口減少地域における新たな可能性として示されました。

地域を「住む場所」だけでなく、学びや仕事、居場所が重なり合う場として捉える視点が共有されました。こうした実践を通じて、一人ひとりが無理なく続けられる形で、持続可能な暮らしと地域のあり方を模索していることが伝えられました。また、日々起きることについて全て奇跡(=有り難い)と感じると、日々の暮らしでは感謝しかない、との言葉もありました。

コーディネーター鵜飼様からのコメント

藤田さんに質問です。山間地域居住で不便を感じることも多いと思いますが、なぜ「感謝しよう」と思うようになったのでしょうか。

藤田様からは、

自然の中で暮らしていると四季の変化等の自然の恵みを享受することが多い、山に住んでいること自体が感謝しかない、それがベースにあるとのことでした。

また、山間地域であってもリモートワーク等の普及により働くことができる場が増えているので、これから就職活動を行う学生が仕事を選ぶ前に自分が住みたい場所を選ぶ、という新たな視点を示されました。

遠田様からは、「従業員の幸せ」を軸にした職場づくりの事例が紹介されました。廃棄物処理業が抱える「きつい・危険」といったイメージの中で、人を大切にする働き方をどのように実現してきたのか、その背景と取り組みが語られました。



安全と健康を守る取り組みとして、事故防止や熱中症対策、AED講習の実施に加え、森林を活用したウォーキングやヨガ、部署ごとのオリジナル体操などが紹介されました。

また、時間単位の有給制度や時短勤務の導入、意見を吸い上げる仕組みづくりなど、多様なライフステージに配慮した働き方についても触れられました。

さらに、地域貢献活動や社内交流、学びの機会を通じて、社員同士や経営層とのつながりを深めている点も特徴として挙げられました。これらの取り組みを通じて、誰もが安心して働き、自分らしく暮らせる地域社会の実現を目指していることが共有されました。

従業員が生き生き働くことができる企業の事例紹介 ②

株式会社パレット吉田 香奈子様



吉田様からは、ケーキづくりを通じて人の笑顔を大切にする経営の事例が紹介されました。

滋賀県内で5店舗を展開し、すべての店舗にパティシエを配置して作りたてのケーキを提供するという、現場を重視したものづくりの姿勢が語られました。従業員の立場から事業承継し代表に就任した経験を踏まえ、『関わる人の笑顔を増やし続ける』ことを経営の軸にしている点が紹介されました。

健康経営の考え方のもと、長年続けている「ありがとうカード」や、社員同士の共感体験を大切にした交流の取り組みが実践されています。また、地域の学校でのケーキ作り体験や職業講話などを通じて、従業員自身が仕事への誇りを深める機会を設けていることも特徴です。こうした取り組みを通じて、従業員が笑顔で働くことが、地域に愛され続けるケーキ屋としての持続的な経営につながっていることが示されました。

コーディネーター鶴飼様からのコメント

それぞれの企業が素晴らしい取組をされていますが、他の企業が取組を参考にするには、どのような点がポイントとなるのでしょうか。

- ・近畿環境保全株式会社 遠田様からは、「まずはやりたいと言ってみること」「小さくても続けること」が大切だという話がありました。SNSの投稿を少し工夫する、できる人ができる役割を担う——そんな一歩が、活動の広がりにつながっているとのことでした。
- ・株式会社パレット 吉田様からは、「新しい取り組みは3年続けてみる」という印象的な言葉がありました。一度やめてしまった「ありがとうカード」を再び続けた経験から、定着には時間が必要だと語られました。

- 事例紹介まとめ -

今回の事例紹介では、周りの人や地域との関係、そして自身を大切にしながら、日々の取り組みを積み重ねている様子が共有されました。

「感謝」を重要な要素として捉えていることが示され、特に、「当たり前ではないことへの感謝」、「与えることの重要性」、「受け入れる姿勢」が印象的なキーワードでした。

これらの事例を踏まえ、続くパネルディスカッションでは、取組を継続するための工夫や、他の企業・地域へ広げていくためのヒントについて意見が交わされました。

パネルディスカッション

4名による事例紹介後に、パネリスト4名とコーディネーターの鵜飼様によるパネルディスカッションを行いました。



コーディネーター鵜飼様

Q1 | 朝比奈さんは地域の中で活動を続けておられ、藤田さんも地域に入りながら実践を重ねてこられたと思います。地域と良好な関係を築きながら活動していくためのコツについて、教えてください。また、企業のお二方には、地域とのつながりづくりのコツを教えてください。

地域との関係づくりについては、立場の異なる4人それぞれの視点から実感が共有されました。

「まずは地域の声に耳を傾けること」(朝比奈様)

「地域の“困りごと”を引き受けてみること」(藤田様)

「森を守るだけでなく、地域と一緒に楽しむ関係を築くこと」(近畿環境保全株式会社 遠田様)

「店舗ごとに顔の見える関係を大切にすること」(株式会社パレット 吉田様)

共通して語られたのは、

地域とのつながりは制度や仕組みだけで生まれるものではなく、日々の関わりの積み重ねから育まれていくという考え方でした。



コーディネーター 鶴飼様

Q2 | 近畿環境保全株式会社と株式会社パレットに質問です。最近、社内イベントを負担に感じる人も多いのではと思いますが、どのような工夫をもとに社員に参加してもらっていますか？

・近畿環境保全株式会社 遠田様からは、「参加しやすさ」を第一に考えた工夫が紹介されました。

森林活動や健康づくりイベントなどは業務時間内に実施することで、私的な負担を感じにくくし、無理なく参加できる環境を整えています。

また、「全員参加ありき」ではなく、自然と行ってみたくなる内容づくりを大切にしているとのことでした。

・株式会社パレット 吉田様からは、

「無理に参加させない」という姿勢が印象的でした。

イベントそのものよりも、日頃からの信頼関係や風通しの良いコミュニケーションを重視し、「参加したい」と思える関係性を育てることが大切だと語られました。

両社に共通していたのは、

“参加率を上げること”を目的にするのではなく、社員一人ひとりの気持ちに寄り添うこと。その積み重ねが、結果として自然な参加につながっている、という考え方でした。

コーディネーター 鶴飼様



Q3 | フォーラムの冒頭にお尋ねした、パネリストの皆さんの暮らし方や働き方の中で感じておられる「滋賀らしいポイント」について教えてください。

それぞれのお立場からユニークな「滋賀らしさ」についてお答えいただきました。

・滋賀の食材を使ったお菓子作りなど、地域に根差した事業を通じて、地元で誇りを持つことができる。これは滋賀だからこそできる強み。(吉田様)

・琵琶湖と森、山が一体となり、豊かな自然環境が共存していること。また、人の温かさについても滋賀県特有のものだと思う。(遠田様)

・森林は全国にあるが、滋賀県の森林の後ろには琵琶湖がある。県民みんなの意識を一つにできる琵琶湖があることが滋賀らしさ。(藤田様)

・人々が温かいこと。そして、自然の恵みをうまく活用し、楽しんでいること。(朝比奈様)

皆様からは、滋賀の豊かな自然環境、そして何よりも「人の温かさ」と「地域への誇り」という、多角的な「滋賀らしさ」の魅力を改めて教えていただきました。



コーディネーター 鵜飼様

Q4 | 同じく、フォーラムの冒頭にお尋ねした、パネリストの皆さんにとっての「豊かさとは何か」を教えてください。

- ・余白があること。暮らしの中の小さな幸せを、感謝の気持ちで受け取れること。(朝比奈様)
- ・森。人間の体の健康を維持する仕組みと自然の生態系のバランスが同じだと気づいた。自分の体が森だと考えて、自然の摂理と同じようにバランスを保ち、健康を維持しているという実感しながら生きていることが豊かだと感じる。(藤田様)
- ・選択肢の多さ。自分がどう働くか、どう生きるかを選べる自由が豊かさに繋がる。(遠田様)
- ・「自分ってええやん」と思える瞬間。現状を全て受け入れ、感謝できること。日々、当たり前にあることの中に感謝を見出すことで、「良い人生」と感じられるようになる。(吉田様)

皆様のお話からは、心身のゆとりと、多様な選択肢、そして何よりも日常に感謝し、自分を肯定できることこそが真の豊かさであるという、大変深いメッセージをいただきました。単なる物質的な豊かさだけではない、心の充足が「新しい暮らし方」を形づくる重要な要素であることがわかりました。

- まとめ -

コーディネーターの鵜飼様からは最後に、4名それぞれの実践から、「新しい暮らし方」を多角的に捉える視点が示されたと振り返りがありました。

「新しい暮らし方」を考えるうえで、参加者一人ひとりが、自分にとっての“豊かさ”とは何かを立ち止まって考える時間を持ってほしい、というメッセージが伝えられました。

その第一歩として大切なのは、忙しさの中に“余白”や“考えるゆとり”をつくることではないか、と語られました。本フォーラムを通じて、「新しい暮らし方」は誰か特別な人のものではなく、日々の活動や地域との関わりの中から生まれていくものであることが、具体的な事例と対話を通して共有されました。

参加者一人ひとりが、自分にとっての豊かさや大切にしたい価値観を見つめ直し、今後の暮らしや行動につなげていくためのきっかけとなりました。

- 本フォーラムのキーワード -

【概念】

豊かさ、多様性、滋賀らしさ、感謝(自分から生み出す、当たり前にあるものへの感謝)、与えること(会社から社員へ、個人から地域へ)、主体性、ウェルビーイング(心身の健康、社員の幸せ)、バランス(仕事とプライベート、心と体の健康)

【関係性・行動】

つながり(多様な繋がり)、対話、コミュニティ、共創、受け入れる(受け止める)、信頼関係、地域貢献、社員の幸せ(従業員幸福度)、健康経営、新しい働き方(ワークライフバランス、多様な関わり方)

【具体的な要素・活動】

居場所(地域、子ども等)、関係人口、地域活動、空き家活用、環境保全、食品ロス、循環(資源、感謝の)、自然(共存、恵み)